



東成瀬村で見つけた“生き方”

小田島 朋

(東成瀬村地域おこし協力隊)

1 ただ「秋田を出たい」だけだった私が、協力隊になるまで

人口約2,200人の東成瀬村。秋田県の最南端に位置するこの村で、私は地域おこし協力隊として活動しています。

協力隊として活動をはじめて3年目を迎えた今年。「この村に来て、良かった」気がつけばそんな言葉が自然と口をついて出るようになっていました。ここでの暮らし、出会い、学びが、今の私のすべてを形作ってくれています。

「とにかく秋田を出たい」—それが学生時代の正直な気持ちでした。

高校卒業後、私は「秋田を出たい」という思いだけで上京しました。都会での暮らしに憧れ、東京の飲食店で働きながら毎日を駆け抜けるように過ごしていました。仕事は忙しくも充実していて、自分なりに成長を感じていた時期だったと思います。あるときふと、「秋田ってどんなところなの？」と聞かれたことがありました。それに答えられなかった自分。気がつけば、故郷のことを自分の中からどんどん遠ざけていたことに気づきました。その瞬間から、少しずつ「秋田に戻りたい」、「秋田のために何かしたい」という気持ちが芽生え始めました。

秋田に戻る決心をしたのは、そんな思いが積み重なった頃。何かきっかけを探していたとき、東京で開催されていたAターンイベントに立ち寄りました。そこで出会ったのが、東成瀬村の地域おこし協力隊の募集でした。村の人たちのあたたかさ、そして自然と共にある暮らしに惹

かれて、「ここでなら、自分のルーツと向き合えるかもしれない」と思い、協力隊としての一步を踏み出すことを決めました。

いま、こうして地元の横手市増田町のすぐそばで暮らしながら、地域の方々と関わる仕事に取り組む日々は、あの頃の自分には想像できなかった豊かさがあります。

2 「ここに生きる」人たちに会って

協力隊として村に関わる中で出会った人たちは、間違いなく私の人生を大きく変えてくれた存在です。地元のために本気で動く大人たちの姿。「なんだか心の奥が動かされる」そんな出会いが、村では日常の中にぼつりぼつりと現れます。村の人たちとの出会いが、私にこれまでなかった刺激を与えてくれました。気づけば私は、「この人たちの“何かしたい”を、形にすることができたら」と思うようになっていました。協力隊として、自分にできることがあるなら、そんな思いに寄り添いたい。協力隊としての活動も半年を迎えた頃、そんな気持ちが芽生え始め、地域で何かを始めたいという声をつなぎ、実現していくための団体『丸太組』を協力隊の先輩と共同で立ち上げました。そして今、「100年後に残したい文化や風景を創る」ことを目標に、丸太組の活動に力を注いでいます。

3 「やってみたい」がつながっていく村

丸太組の活動を通して感じているのは、村には「やってみたい」という思いがたくさん眠っ

ているということ。でもその想いは、一人ではなかなか形にならない。だからこそ、「仲間がいる」、「一緒にやってくれる人がいる」というだけで、挑戦が始まっていくのではないかと思います。丸太組は、そんな“やってみたい”を持ち寄って、一緒に形にしていく場所です。『丸太組』という名前には、「村の間伐材を使って、みんなが集まれるログハウスをつくりたい」という想いを込めています。

このログハウスこそが、村の象徴的な文化や風景になってほしい。みんなで建てた家だからこそ、大切にされるし、それこそが“文化”になっていくはず。村の資源を活かして、村の人たちが集い、語り合い、笑い合える“みんなの家”を。ロゴマークも、そんなぬくもりを感じてもらえるよう、ログハウスの丸太をイメージして、代表自らがデザインした、とっておきのマークです。



(丸太組のメンバーと)



丸太組
MARUTAGUMI
(丸太組のロゴ)

4 村の魅力を届けるマルシェ、『丸太市』のはじまり

丸太組として最初に取り組んだのが、『丸太市』というマルシェイベントでした。きっかけは、私の何気ない「村でマルシェをやってみたい」という一言でした。食とは、私にとって生きることそのもの。食べることは人を元気にし、人と人とをつなげてくれる。これは、前職の飲食店勤務での経験を通じて得た、私自身の大切な軸です。「村の美味しいものを、もっと多くの人に届けたい」そんな思いから、地域の方々の協力を得て丸太市を企画しました。会場の準備から出店者の声かけ、チラシのデザインに至るまで、何もかもが初めての挑戦でしたが、丸太市というイベントが少しずつ形になっていきました。

迎えた当日。たくさんのお客様が会場に足を運んでくださいました。その光景を見た瞬間、胸の奥がぎゅっと熱くなって、「東成瀬村に来て、本当によかった」と、心からそう思うことができました。知らない土地での挑戦に不安もありましたが、この日感じたぬくもりや人の優しさ、みんなで何かを作り上げる喜びが、すべてを包み込んでくれました。

丸太市が、この村の新しい文化として育っていくことを願いながら、これからも大切に丸太市を続けていきたいと思っています。



(丸太市の様子)

5 『丸太ロッジ』という“みんなの場所”ができるまで

前述の通り、丸太組の最終目標は丸太でログハウスを建てることです。イベントのときだけでなく、日常の中で人が集まれる場所を早くつくりたいと思い、次に動き出したのが『丸太ロッジ』でした。丸太ロッジは、中古のプレハブを組員自らの手で改装しスタートした、小さな飲食店です。内装も外装も、すべてが組員の手づくり。あたたかな空気が流れるこの空間は、みんなの想いが詰まった“みんなの場所”です。



(丸太ロッジ)

ロッジのオープンにあわせて開発したのが、村の特産品を活かしたオリジナル商品「いわなドッグ」。主役は、清らかな湧き水で育ったいわな。かつては一本まるごとのいわなを囲炉裏で焼き、みんなで味わっていたという、村に根づく食文化を現代風にアレンジし、いわなを丸ごと使用したメニューです。自家製のいぶりがっこ入りタルタルソースを添えて、村ならではの風味をぎゅっと閉じ込め、ただ“美味しい”だけではなく、この土地でしか味わえないものを感じてもらえたらと、気合いを込めた一品に仕上がりました。ロッジには、協力隊おすすめの本や、近隣地域から届くこだわりのコーヒーも並びます。食事を楽しむのはもちろん、人との出会いや偶然の発見、空間そのものを味わって

ほしい。そんなメッセージを込めて、場所づくりにもこだわってきました。そして今年は、東成瀬村のお米と地元の食材で提供する「おにぎりスタンド」を、新たなチャレンジとしてスタートします。また、週末限定で組員のみが使える「シェアキッチン制度」も導入予定です。

ロッジが、お客様にとって新鮮で、組員にとって挑戦できる場所であり続けられるよう、これからもその可能性を広げていきたいと思っています。

このロッジで目指しているのは、ただ使ってもらえる場所ではなく、人やアイデアが交差し、新しい価値が生まれる文化の発信基地。丸太組の活動の原点は「100年後に残したい文化や風景を創る」ことです。ロッジも丸太市もその小さな一歩であり、未来への種まきでもあるのです。



(いわなドッグ)

6 第二のふるさとで、これからも

東成瀬村に協力隊として移住して丸2年。最後の年を迎えるこのタイミングで、この記事を書きながらこれまでの時間を改めて思い返すことができました。移住したばかりの頃は、何もかもが手探りで、周りが敵に見えてしまう日もありました。「やりたいこと」と「できること」のギャップに戸惑い、不安と焦りでいっぱい

だった毎日でした。

それでも、そんな私の背中を押してくれたのは、村の方々のあたたかさや、同じ思いを持って活動する協力隊の仲間存在でした。たくさんの出会いに支えられました。本当に感謝しかありません。残り1年の任期を前に、私はここで何をすべきか模索し続けています。

考える事をやめず動き続けることが、ここで出会った人たちの思いや願いに応えていく歩になるのではと、毎日がむしゅらに走り続けています。

そして、私は任期が終わったあとも、この東成瀬村で暮らしていきたいです。村で出会った人たち、自然、日々の暮らしのあたたかさが、深く根づいて、いつの間にかこの場所が心地よくなってきました。離れる理由は見つかりません。もちろん、丸太組の活動も、続けていきます。信じて仲間になってくれた組員の皆さんの期待に少しでも答えられるよう、村の人たちと一緒に、時には悩みながら、でも楽しく、前を向いて歩んでいきたいと思います。

丸太組が、秋田のあちこちで皆さんの目に留まるような存在になれば嬉しいです。ここで出会ったすべてのご縁を大切に、これからも“丸太”のように、太くあたたかく、この村で過ごしていきたいと思います。

＜担当者から一言＞

東成瀬村では、今回ご紹介したお二人を含め、令和7年8月1日時点で53名の協力隊が活動しています。

今回寄稿した2名のほか、村内の文化財保護を中心に行っていたただく方などもおり、本村の地域おこし協力隊事業は多岐にわたり展開しています。さらに、村との委託により協力隊の事業を担っている「東成瀬テックソリューションズ株式会社」では、「地域課題をITにより解決する」ことを標榜しつつ、プログラミング教育の支援や、スマホ教室の実施などで、地域の活性化に取り組んでいます。

2,200人ほどの小さな村に、首都圏をはじめ様々な地域からたくさんの方々が協力隊として移住し、毎年の豪雪に苦慮しつつも、それぞれの分野で精力的に活動しています。協力隊の方々と一緒に仕事をしていく中で、移住した方にしか見えない「東成瀬村の良さ、らしさ」に触れることができ、地元の良さを再認識することができています。

今後も、新たな担い手とともに次の東成瀬村の歴史を紡ぐことができるよう努めていきたいと思っています。

（東成瀬村役場企画課 土谷昂平）